

宗祇筆『源氏物語』について

— 空蟬・梅枝・宿木・浮舟・手習・夢浮橋を中心に —

宮田 光

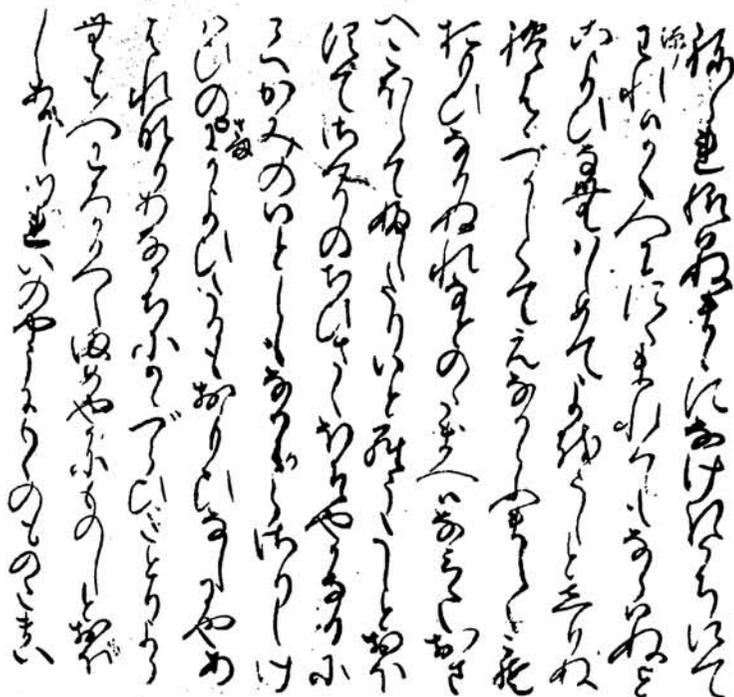
はじめに

本稿で紹介する某家蔵・伝宗祇筆『源氏物語』（以下宗祇本と略す）は、『源氏物語評釈』（全十一巻・梅野きみ子・乾澄子・岡本美和子・嘉藤久美子・田尻紀子・宮田光・山崎和子著・風間書房・二〇一八年）の巻七以後の校異欄の校合に、「伝宗」として使用した写本である。この校異にあたっては、写本・複製本・影印本の調査など、可能な限りの資料を蒐集して要所要所についての正確な校訂を期したのであった。その時に、『源氏物語大成』（池田亀鑑編著・中央公論社、以下「大成」と略す）に採用されていた桃園文庫蔵『源氏物語』（別本、空蟬・梅枝・宿木・浮舟・手習・夢浮橋の六帖、以下桃園本と略す）については、所在不明のために調査できず、校合本としての採用を断念したのであった。しかし私は、宗祇本と桃園本がしばしば奇妙に一致しているのが気になっていた。本稿では、主に両本に共通する六帖を中心に、宗祇本と桃園本との関係を考察したい。

宗祇本の書誌

宗祇本は、室町時代末期の写本五四冊（桐壺く夢浮橋の全巻揃）。

宗祇筆『源氏物語』について



〔図1〕（宗祇本 空蟬巻 一才）

〔図2〕(宗祇本 篝火巻 三才)

全巻一筆と思われる。綴葉装。各冊縦一六・二種・横一七・四種前後、所謂六半本である。縹色の紙表紙。各冊表紙中央に巻名の貼題簽(縦九・二種・横二・四種前後)。本文用紙は斐紙。一面二行。任意に読点・濁点・人名・引歌・語義・異文などの同筆の書き入れがあり、見せ消ち・補入・重ね書きにより訂正されている箇所があるが、それらの書き入れが親本にあったものか筆者によるものかは不明。誤って引歌を本行に書き、棒線で消して「ひき哥」と記入する箇所があり〔図2〕、親本にも何らかの注記があったと思われる。五四帖は恐らく

同一の筆であるが、それは他人から依頼された所謂嫁入本のような写しではなく、自ら必要があって急いで写したものである。かなりの速筆で、癖の強い一見乱雑な字なのに誤りは少なく、上質の紙を使用している所から見ても、筆者はかなり学識のある人物と思われる。他に、寛文八年(一六六八)と寛文十年(一六七〇)の畠山牛庵の折紙二種、宝永五年(一七〇八)の古筆了仲の折紙、古筆了任と了仲の極札二種があり、何れも宗祇真筆としている。その中の一種を紹介しておく。

源氏物語六半本/五十四帖種玉庵/宗祇法師真筆/外題九条関白
植通公/御一筆無疑慮者也/黄金式百枚

寶永五子曆/中冬下旬/古筆了仲 判

〽は改行)

当時の「黄金式百枚」の価値はよくわからないが、余程の高値であろう。五十四帖全てを殆ど誤りもなく速筆で書き通したことを考えると、宗祇真筆の可能性はかなり高いと思われる。

桃園本については、「大成」第一巻・凡例の「校異ニ採擇シタ諸本の「別本」の中に「桃 筆者未詳 桃園文庫蔵」とある以外の説明はなく、同第七巻の「現存重要諸本の解説」にも触れられていない。池田亀鑑博士の桃園文庫から紅梅文庫の前田善子氏を通じて天理図書館に収められた、多くの「源氏物語」があるが、『天理図書館稀書目録和漢書之部』第三にも、この別本桃園本六冊に該当するものは見当たらない。そのため、本稿の桃園本に関する記事の根拠は、残念ながら、すべて「大成」当該巻の校異欄によることをお断りしておく。資料に挙げた頁数・行数も「大成」のものである。

宗祇本と桃園本との関係

1 宗祇本の各巻頭三丁分について

大体の傾向を知るために、宗祇本の各巻頭三丁分の分量に限って、「大成」に掲載されている桃園本の校異の全項目の、別本における分布を調べたものが表1である。なお、「大成」の底本は、浮舟・夢浮橋巻（池田本）を除き、大島本である。

桃園本の校異の全項目数のうち、全体としては単独異文が半数を占め、意外に多い。他本と一致する共通異文を見ると、空蟬巻は陽明本との、梅枝巻は陽明本と保坂本との、宿木巻は保坂本との距離が近いことが分かる。浮舟巻は他の別本とはほぼ等距離、手習巻は池田本、夢浮橋巻は保坂本と非常に近いために、この二巻は単独異文が少ないのであろう。

次に、桃園本の校異の全項目と宗祇本との距離、また単独異文と宗祇本との距離について調べたのが、表2である。

◎—桃園本と宗祇本が、僅かな表記の違い・音便を除き、完全に一致しているもの。

○—桃園本と宗祇本の関係が深いことは確かであるが、補入・見せ消し・傍書などの桃園本の原態が不明のため、判断を保留したものである。

△—桃園本と宗祇本との関係は認められるが、読み方が複数あるとか、誤写・誤読の可能性があるため、判断を保留したものである。

×—桃園本と宗祇本が不一致のもの。

全項目でも単独異文でも、桃園本と宗祇本が完全に一致している比率が非常に高い。この傾向は、巻頭だけでなく巻全体でも変わらないであろうと考えて、次に、六巻全体の桃園本の単独異文と宗祇本の関係調べたのが、表3である。単独異文を取り上げる理由は、傾向が変わらないからだけではなく、「大成」の校異欄が、青表紙本以外は簡略化されていて、河内本・別本の場合、複数の本に共通異文がある

宗祇筆『源氏物語』について

〔表1〕

	「大成」桃園本の校異の全項目数	単独異文の項目数 (%)	共通異文の項目数	桃園本と一致する別本の項目数							
				高松宮本	陽明本	保坂本	飯島本	池田本	国冬本	麦生本	阿里莫本
空蟬	76	42 (55.3)	34		22		10			10	7
梅枝	37	26 (70.3)	11		8	8				0	0
宿木	14	7 (50.0)	7	1	2	5			1		2
浮舟	24	18 (75.0)	6	3	2				3	3	
手習	27	2 (7.4)	25	6	6	7		20	7		9
夢浮橋	34	12 (35.3)	22	9		20			9	4	3
計	212	107 (50.5)	105	19	40	40	10	20	20	17	21

〔表2〕 桃園本と宗祇本の一致する割合

			◎	○	△	×
空蟬	桃園本の項目数 (%)	76	54 (71.1)	18 (23.7)	2 (2.6)	2 (2.6)
	うち単独異文 (%)	42	29 (69.0)	10 (23.8)	1 (2.4)	2 (4.8)
梅枝	桃園本の項目数 (%)	37	26 (70.3)	2 (5.4)	3 (8.1)	6 (16.2)
	うち単独異文 (%)	26	17 (65.4)	2 (7.7)	3 (11.5)	4 (15.4)
宿木	桃園本の項目数 (%)	14	13 (92.9)	1 (7.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
	うち単独異文 (%)	7	6 (85.7)	1 (14.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
浮舟	桃園本の項目数 (%)	24	18 (75.0)	3 (12.5)	0 (0.0)	3 (12.5)
	うち単独異文 (%)	18	13 (72.2)	2 (11.1)	0 (0.0)	3 (16.7)
手習	桃園本の項目数 (%)	27	25 (92.6)	1 (3.7)	0 (0.0)	1 (3.7)
	うち単独異文 (%)	2	2 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
夢浮橋	桃園本の項目数 (%)	34	30 (88.2)	2 (5.9)	1 (2.9)	1 (2.9)
	うち単独異文 (%)	12	8 (66.7)	2 (16.7)	1 (8.3)	1 (8.3)
計	桃園本の項目数 (%)	212	166 (78.3)	27 (12.7)	6 (2.8)	13 (6.1)
	うち単独異文 (%)	107	75 (70.1)	17 (15.9)	5 (4.7)	10 (9.3)

【表3】各巻の桃園本単独異文と宗祇本が一致する割合

	単独異文 の項目数	◎ (%)	○ (%)	△ (%)	× (%)	※
空蟬	167	130 (77.8)	27 (16.2)	2 (1.2)	8 (4.8)	2
梅枝	177	129 (72.9)	20 (11.3)	5 (2.8)	23 (13.0)	14
宿木	284	216 (76.1)	11 (3.9)	12 (4.2)	45 (15.8)	43
浮舟	652	557 (85.4)	21 (3.2)	28 (4.3)	46 (7.1)	43
手習	180	105 (58.3)	14 (7.8)	10 (5.6)	51 (28.3)	50
夢浮橋	79	57 (72.2)	8 (10.1)	7 (8.9)	7 (8.9)	6
計	1,539	1,194 (77.6)	101 (6.6)	64 (4.2)	180 (11.7)	158

場合、原本の状態が分からないの
に対して、単独異文の場合は原本
の表記が分かるからである(補入・
見せ消ち・傍書などは不明)。

2 桃園本の単独異文と 宗祇本の関係

表3によって、桃園本と宗祇本
が完全に一致しているものの比率
が非常に高いことが分かる。しか
も、殆どの場合、表記なども一致
している。この二種の本に密接な
関係があることを認めざるを得な
い。以下、実例を挙げて、桃園本
と宗祇本の間を具体的に見てい
きたい。

【◎について】(表4)

【表4】		「大成」頁・行	「大成」見出し	桃園本	宗祇本
ア	八八・2		たとしへなく	たとしくなく	たとしくなく
イ	八八・4		いひたつねは	いひたつねは	いひたつねは
ウ	九八〇・7		ほと	ほとち、おと、におとらす	ほとち、おと、におとらす
エ	九八八・6		おほとなふらみしかく まいりて	みかうしまいりて御との あふらみちかくて	みかうしまいりて御との あふらちかくて

コは梅枝巻。二本だけの異文。宗祇本の「品」の字が「所」と似て

【△について】(表6)

このように、宗祇本が桃園本によって見せ消ち・傍書・補入・重ね
書きなどの変更を加えて、結果的に宗祇本と桃園本が単独異文として
一致しているように見えるものが、表3の○のうち、空蟬巻26例、梅
枝巻12例、宿木巻9例、浮舟巻13例、手習巻14例、夢浮橋巻8例もある。
しかし、桃園本の正確な原態が分からないため、これらの補入・見
せ消ち・傍書などが桃園本にあった可能性も、或いは宗祇本の方が桃
園本より早い可能性も無いとは言えないので、結論を保留した。

【○について】(表5)

ア・イは空蟬巻。桃園本・宗祇本の何れも誤り。「へ」と「く」、
「れ」と「ね」は似ているので、誤ることもあろうが、意味が通らな
いの一致しているのは、どういう訳か。
ウ・エは梅枝巻。言葉をつけ加えている例。傍線部は何れも二本
だけの単独異文である。このように二本が一致しているのが、圧倒的
に多い。

〔表5〕

	「大成」頁・行	「大成」見出し	桃園本	宗祇本	備考
オ	八五・7	いとをしくさうくしと思ふ	くちをしく思ひけり	○さ、うく、○しく思ひけり	宗祇本は見せ消ち・訂正
カ	八五・7	なみくならず	なみくならぬ	なみくならず	宗祇本は傍書
キ	八六・1	のたまひまつはすは	のたまひめくらす	のたまふ○ <small>いぬくらす</small>	宗祇本は傍点で「ふ」を見せ消ち、補入
ク	八六・7	すみのまより	かたすみのまより三のまの	かた○三のまの <small>すみのまより</small>	宗祇本は補入
ケ	一九九三・10	いたきいれ	いたきつれ	いたきつれ	宗祇本は「いれ」の「い」の上に「つ」を重ね書き

〔表6〕

	「大成」頁・行	「大成」見出し	桃園本	宗祇本
コ	九七五・4	かうとも	かうの所とも	かうの品とも
サ	一八七一・3	右の大殿	左大臣殿	右大臣殿
シ	一八八一・9	御とも	さとも	御とも
ス	九八六・10	給へる	給る	給える

いるため、桃園本が「品」を「所」と読み誤った可能性も考えて、保留にした。

サは浮舟巻。諸本はすべて「右」である。「左」は桃園本のみ。しかし宗祇本をよく見ると、もとは「左」で、縦線を加えて「右」に訂正したように見える。その過程が不明なので保留にした。

シは浮舟巻。諸本は「御とも」で、「さとも」とするのは桃園本のみ。宗祇本はもとの「さ」の上に「御」を重ね書きしているように見え、しかも右側に「さ」と傍書してある。

宗祇筆『源氏物語』について

本は「給える」。桃園本の「給る」は「たまはる」「たまふる」「たまへる」と読む可能性があり、一致しているとは決められないので保留にした。

△は、大体は、二本とも同じだった可能性があるが、結果的に諸本に近いのは宗祇本のように思われる。

【×について】(表7)

このように、「御」と「さ(佐)」、「へ」と「つ」、「ま(万)」と「さ(左)」、「こ(己)」と「う(宇)」、「く」と「く(久)」、「ふ(布)」と「け(希)」など、判別し難くて読み誤りの可能性のある例は、保留にした。

スは梅枝巻。諸本は「給へる」。宗祇

宗祇筆『源氏物語』について

〔表7〕

	「大成」頁・行	「大成」見出し	桃園本	宗祇本
セ	一七〇五・10	おはせはしもと	おはせはしもと	おはせ〇しもと ^ほ
ソ	一七〇六・5	そしらはしけに	そらはしけに	そしらはしけに
タ	一七一五・1	あしこもとに	あしもとに	あしこもとに ^そ
チ	一七二〇・12	頭中将	中将	頭中将
ツ	一七二二・13	老人とも	お人とも	おい人とも
テ	一七二八・1	おはしけると	おわしけたるとは	おわしたるとは ^け
ト	一七三三・14	ものゝ給	物給ふ	物の給ふ
ナ	一八六三・1	ゑむしやし	えんしやうし	えんしやし ^え
ニ	一八六六・4	女房なとも	女など	女房など
ヌ	一八六六・11	かまへよ	かまてよ	かまえよ
ネ	一八六六・12	家司	けい用	けい司 ^い

原則として、○や△のように二本が一致する可能性がある場合を除き、桃園本と宗祇本の間、音便と表記以外に一字でも相異があれば、すべて×にした。

・宿木巻の例。

ソ・チ・ツ・トは、桃園本には脱字があるが、宗祇本は脱字がない。セ・タ・テは、桃園本の欠陥を宗祇本が修正しているかに見えるもの。

・浮舟巻の例。

ナは、句宮の「あけてみんな。怨じやし給はんとする」という言葉を、桃園本は、「し」を「うし」と読んだか、意味を理解できなかった。

たのか、「えんしやうし」と衍字を入れている。

ニは、「房」の崩した字が「な(奈)」に近いために、桃園本が誤って「女など」としたか。

又は、宗祇本の「え」は「盈」を字母とする字である。実は、桃園本の校異を見ていて、宗祇本の「え(盈)」を桃園本では「て」とする箇所が他にも何例かあった。少なくとも単独異文の表記については、この二本の表記は、同じ場合が圧倒的に多い。どこかの時点で読み誤ったのかもしれないと憶測するのである。

ネは、桃園本の「けい用」ではさすがに分かるまい。別本の麦生本に「いゑつかさ」があるが、諸本は「家司」である。宗祇本は「いゑ司」を傍点で見せ消ちして「けい司」と直している。宗祇本は、

他本を調べて意味不明の箇所を正したと思われる。

このように、桃園本が明らかに誤っていて、宗祇本は正しい例が多い。宿木・浮舟・手習のような長い巻では桃園本に誤りが多く、宗祇本が正確なため、×が多くなった。表3の※欄は、桃園本が誤っているために×になった項目の数である。×の殆どが桃園本の誤りで、宗祇本は誤っていないことが分かる。

以上、表3を検討してきたが、桃園本と宗祇本の距離の非常に近いことが分かった。

素直に考えると、最初に桃園本かその同系統の写本を急いで写した

筆者が、後で桃園本かその同系統の写本を用いて校合したのではないか。◎が多い所から、当初の本文が既に桃園本に非常に近いことが分り、その後校合した本も同系統の本であることが、○や×の状況から推測される。アやイは、校合時の見落としか。誤りもその通りに手を入れている箇所もある一方で、筆者の判断を示している箇所もある。

梅枝巻の例を挙げておく。

〔図3〕(一八才)

○九八八・1

〔諸本〕 さまざまのつきかみのほんとも

〔桃園本〕 さまざま成へきかみの本ともふるきあたら

しき

〔宗祇本〕 さまざまなるつきかみのほんこともふるき

あたらしき

宗祇本は「へ」の上に「つ」を重ね書きして、細字で右に「つ(徒)」と書き、さらに「巻物也」と書き添えている。「なるべき紙」ではなく、「継ぎ紙」と読むべきだという判断が示されている。

〔図4〕(二二才)

○九九〇・6

〔諸本〕 しりひに(肖柏本「しりひに」・麦生本

宗祇筆『源氏物語』について

〔しか〕

〔桃園本〕 しりに

〔宗祇本〕 しりひに

宗祇本は、「ひ」に見せ消ちをし、右側に細字で「後よはく成事」と注記している。注記が先にあった可能性も否定出来ないが、恐らく見せ消ちと注記は同時であろう。とすると、「しりに」を見て「ひ」に見せ消ちを加えたものの、意味からすると「しりひに」だという判断があったのであろう。

他の巻にもさまざまな注記があり、すべてが宗祇本の筆者によるものではないとしても、かなりの部分は筆者によるものではないかと思われ、筆者の学究的な姿勢を窺わせる。

おわりに

宗祇本のうち、六巻のいろいろな面を見てきた。正確さは宗祇本の方が優れているが、この六巻が別本の桃園本と非常に近いことは疑えない。宗祇本の残りの四十八帖は、当時は全巻揃っていた桃園本のツレを写したのであろうか。今となっては知るすべもない。

宗祇本をざっと調べたところ、各巻は、以下のように分類できそうである。青表紙本系の本文と河内本系の本文が混合しているものは別本とした。

〔青表紙本〕

桐壺・末摘花・紅葉賀・花宴・葵・明石・潯標・蓬生・絵合・松風・薄雲・朝顔・少女・初音・胡蝶・虫・行幸・藤袴・真木柱・藤裏葉・若菜上・若菜下・柏木・横笛・夕霧・御法・幻・匂宮・紅梅・竹河・橋姫・椎本・総角・早蕨・東屋・蜻蛉

〔河内本〕

帚木・夕顔・若紫・賢木・須磨・関屋・篝火・野分・鈴

宗祇筆『源氏物語』について

虫

〔別本〕 空蟬・花散里・玉鬘・常夏・梅枝・宿木・浮舟・手習・
夢浮橋

また、巻末に高松宮家本（耕雲本）と同じ和歌が書き加えてある巻がある。

〔関屋〕 なをそうきゆきあふさかの名のみしてむねにせきやるしたの
なみたは

〔梅枝〕 春の色ものとかにうたふむめかえに又こゑそふる宮のうくひ
す

〔篝火〕 ひかりなきむねのほのほのしらねはもゆとやみけるよその
かゝり火

〔野分〕 野わきせし秋のまかきのはなのかほわれもしほれて物おもへ
とや

〔鈴虫〕 ふりすてしものうき世の秋とたにわすれんとすればすゝむ
しのこゑ

〔蜻蛉〕 手にとればかつはとられぬかけるふのうつろひやすき君か心
か

つ 夏の月ひかりをましてるときはなかるゝ水にかけろふそた

関屋・篝火・鈴虫の三帖の本文は高松宮家本にかなり近い。野分は河内本ではあるが、高松宮家本とは一致しない。梅枝は別本である。蜻蛉は青表紙本系の本文である上に、二首とも耕雲本とは違う歌である。関屋・篝火・鈴虫の三帖はともかく、他の三帖に和歌が書き加えられた理由は不明である。

〔付記〕

『雨夜談抄』（桂宮本・『源氏物語古註釈叢刊』第四卷所収）の見出語と宗祇本帯木巻とを対照してみた。『雨夜談抄』は注釈書であるため、見出語が簡略化されている場合もあり、また桂宮本に至る書写の過程で見出語が原本を忠実に引用しているとは言い難いが、『雨夜談抄』は青表紙本系の本文を用いている。一方、宗祇本の帯木巻は河内本系の本文であり、宗祇は『雨夜談抄』を著すときにはこの本を用いていない。

プロフィール

東海学園大学名誉教授。共著に『恋路ゆかしき大将・山路の露』（笠間書院）、『源氏物語注釈』（風間書房）、『風葉和歌集新注』（青翰舎）などがある。